

第4章 言葉 - 他人の目で見ると

Point 1. 鑑賞するって何??

Point 2. 「情報」と「意味」の対比が根底にある

[この章について]

「ソーシャル・ビュー」と呼ぶ美術鑑賞を例に取り上げながら、言葉を道具として「他人の目で見ると」ということについて見ていく。

●概要

- * コミュニケーションのあり方
- * 見えない人の美術鑑賞
 - ・ 筆者の体験談
- * ソーシャル・ビューの歴史
- * ソーシャルビューの面白さ
- * 白鳥さんの面白い経験
- * 美術鑑賞の目的
- * 「推理しながら見る」こと
- * 見える人も盲目だ

【コミュニケーションのあり方】

どうやって「見る」?

- ・ 視覚や触覚、聴覚や全身で
- ・ 自分以外の人と言葉を交わすことで見る

ねえ!
私の顔に何かついてる?

→他人の目を使って自分の顔を見る

→健常者もやってる

× 「見えない人が見える人の言葉をどう活用しているか」

◎ 「見えない人がいることで、その場のコミュニケーションはどう変わる？」

【見えない人の美術鑑賞】

見えない人が行うのは触覚を用いた鑑賞ばかりではない。○○○

目も手も使わない
で、どうやって作品
にアクセスするの？

・筆者の体験談

2013年、水戸芸術館、ワークショップ「セッション！」

(水戸芸術館の現代美術センターが年に1~2階のペースで開催。「視覚に障害がある人との鑑賞ツアー」)

【内容】

- ① スタッフから主旨と進行の説明
- ② 5人程度にグループ分け。(各グループ一人は見えない人がいる)
- ③ 簡単な自己紹介と、障害の程度の確認
- ④ 指定の作品を順番に鑑賞(一作品にかける時間は20分程度)

作品の前にみんなで立ち、
その作品について
語り合いながら鑑賞する

「3mくらいのスクリーンが3つあって、それぞれに映像が映し出されています。」

「一つ目は雨が降っている様子、二つ目は人々が水に飛び込んでいる様子」

「飛び込んでる水は…あんまり綺麗じゃないです。」

「えっと、さっき太陽って言ったのは実は月でした。」

「飛び込んでるのは大人？子ども？」→「子どもです、多分インドの人かな？」

積極的に声を出してグループの仲間とやり取りをしながら作品を鑑賞している。

通例、美術館では声を出すことはあまり奨励されない。→鑑賞は個人的で内向的

人とかわりながら見る。→ソーシャル・ビューと呼ぶことにする。

「見える人による解説」ではないことに注意

【ソーシャル・ビューの歴史】

触感を使った私設 の美術館。

視覚障害者のための
手で見るギャラリー。
1984年に、村山亜土に
よって渋谷の松濤の
地にオープン。

活動「マヴォ」

(父) 村山 知義

「ギャラリーTOM」
村山亜土

僕たち盲人にもロダ
ンを見る権利がある!!

村山錬 (息子)

触ることには可能性がある。←→美術鑑賞には制約がつきまとう。

- ・彫刻など立体作品が中心になる
- ・触れる絵画→彫刻に近づく
- ・映像作品は触れない

村山鍊：「僕たち盲人にもロダンを見る権利がある」

「絵画なんて無理に分かろうとしなくてもいいんじゃない？」という人も多い。



白鳥健二：「全盲でも絵画を鑑賞できるんじゃないか」

(↑枠にはまるのが嫌い、行動派でユニーク。パイオニア精神あふれる視覚障害者。)

1990 年半ば、大学生の白鳥は、友人が「ダヴィンチの解剖図展」に行くことを知る。

更に仲良くなるために、一緒に行こうと思う。

友人の話を聞きながら、展覧会を鑑賞し、楽しめた。

その後・・・

あちこちの美術館で「一緒に歩いてください」と、協力を求める活動を始める。

→「美術館ではそういうサービスはしていません」という回答。

→→「そこをなんとか！！」と鑑賞経験を重ねる。(個人的な活動)

全盲でも
絵画を鑑賞できるのでは？

やがて全国的な広がりをみせる

1999 年：WS「ふたりでみてはじめてわかること」by エイブル・アート・ジャパン

2000 年：Museum Approach and Releasing (MAR) が発足

→2000 年代中頃にかけて「ソーシャル・ビューのツアー」を 30 回以上開催。

2002 年：ミュージアム・アクセス・ビューの活動 @京都

↓さらに全国的に

2012 年：任意団体「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」設立 by 林健太

→現在最も精力的に活動している「ソーシャル・ビュー」団体

→既に首都圏で 30 回以上の WS を開催してる。

【ソーシャル・ビューの面白さ】

ソーシャル・ビューは「見える人による解説」ではない。

鑑賞するときは、「見えているもの」と「見えていないもの」を言葉にする。

客観的な**情報**。

絵画の大きさ、色、モチーフなど

主観的な**意味**。

思ったこと、印象、思い出した経験

客観的な説明のアプローチは、情報を与え知識は増える。けど、鑑賞したことになるの？

情報化の時代にわざわざ集まって皆で鑑賞する面白さは何？

鑑賞する面白さは

→見えないもの、つまり「意味」の部分を共有すること

眺め、特徴をつかみ、時に遠回りして、自分なりの「意味」や解釈を手探りで見つける。

【白鳥さんの面白い経験】ある作品についての説明

職員：「ここに湖があります。」（←印象派の作品）

白鳥：（なるほど、湖ねえ。。どんなだろう。）

職員：「あれ、よく見たら黄色い斑点があるからこれは野原ですね。」

この「見間違い」に「ソーシャル・ビュー」の面白さが詰まっている。

毎日絵を見てるはずの
職員が描かれている情
景を誤解していた?!

印象派：光を描くことを特徴としている、色の表現にも、絵の具を予め混ぜて色を作ってからキャンパスにのせるのではなく、いろいろな色の細かい斑点を並べて書くことで、離れてみた時に目の中でそれが混ざって見えるように描いてある。印象派は「目のための絵画」。

=印象派の作品を見えない人に伝えるのが最も難しい様式のひとつ。

→なんとかして伝えなければ、印象派の絵画を理解したことにならない。…どう伝える？

「湖っぽい野原」という**客観的で意味的な表現**←本質をついている。

ソーシャル・ビューの新しさは、このゴールに辿り着くまでのプロセスを共有する点にある。

- ・時には正反対の意見がぶつかる。
- ・沈黙が続くこともある。
- ・青を見て冷たいと見る人もいれば、落ち着くとみる人もいる。
- ・この作品を買うならいくら？ 飾るならどこ？

→目的地を「目指す」のではなく、「探し求める」

見えない人にとってだけでなく、見える人にとっても
新しい美術鑑賞

【美術鑑賞の目的】

白鳥→大学の健常者の友人

白鳥：「美術館に行ってどういことがあったら、よかった、という気持ちになるの？」

友人：「作品を見て、新しい発見があったりだとか、気づきがあったりだとか、感動したときが行って良かったと思う時だ。」

白鳥：（情報を得ることではなく、そういう気持ちになることが目的だったら、目が見えなくても行ける!!） →手段は違っても、とにかく同じところに到達しよう！

「やっぱり本物を見るのが一番だよ」とか言われちゃったら、それは無理だなと思っていたと思います。

【「推理しながら見る」こと】

・私たちは「推理しながら見る」ことに慣れていない。

見えない人は、どんな作品なのかをイメージしながら、頭の中に作品を作り上げている。

↑全体がつかめ始めたころに見えない人が投げかけてくる質問は、驚くほどの確

- ・説明がコロコロ変わった時
- ・時間的な変化があった時
- ・より詳しい情報が入ってきた時

新しく入ってきた情報に合わせて頭の中で理解している全体のイメージを柔軟に変えることができる。

「見えない人の頭の中のイメージ」は「見える人の頭の中のイメージ」より柔軟かい説

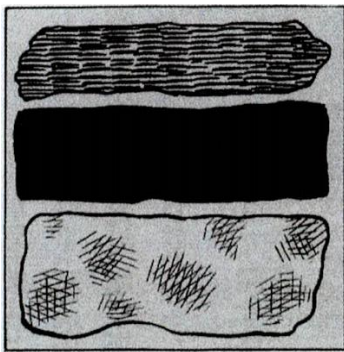
例：ガラスのコップだと思って使っていた湯呑み。

「それは陶器だよ」と言われた瞬間、それは陶器になる。（中途失明の難波さんの経験より）

断片的な情報を総合しつつ、徐々に頭の中に対象を作り上げていく。

ソーシャル・ビューもまた、直したり壊したりしながら作品を頭の中に作り上げる。

→鑑賞は「自分で作品を作り直すこと」の意味



想像してみよう

←いきなりですが、これは何でしょう？

- ・
- ・
- ・
- ・
- ・
- ・

物理的には同じ絵でも、人によって全く違った風に見ている

みんなそれぞれ、頭の中で作品を作っている。

作品をみて意味づけをする＝自分なりに作品を作り直す

他人の見方を自分のものにすることができる。←他人の目で物を見る経験

ソーシャル・ビューの面白さ→一般的な一人の鑑賞とは違い、他人の目で鑑賞できる。

重要なのは「自分の経験を語る言葉」

「言葉にできない感情的なものこそが芸術」という抵抗を越えて言葉にする。

→自分の見方を明確にでき、他人の見方で見える面白さも開けてくる。

→無言の鑑賞とは異なる、より創造的な感想体験の可能性があらわれる。

「視覚障害者をつくる美術鑑賞WS」では、見えない人がナビゲーターと呼ばれる。

→見えるひとから言葉を引き出し、その場を作り出しているのは見えない人の存在

【見える人も盲目だ】

林健太：「見えていることが優れているという先入観を覆して、見えないことが優れているというような意味が固定してしまったら、それはまた一つの独善的な価値を生むことになりかねない。そうではなく、お互いが影響し合い、関係が揺れ動く、そういう状況を作りかったんです。」

白鳥健二：「それまで、見えているのは良いことで見えていないのは良くないという印象があった。見えている人の言う事は絶対的な力があった。見えている人は強く、見えない人は弱いというような…。でも見えている人が湖と野原を間違うというような出来事があって、何か違うぞと思った。(一部要約)」

まとめ

- ・見える人と見えない人が一緒になって、頭の中で作品を作り直していく過程は、「見ることとは何か？」を問い直す作業でもある。
- ・見える人が実は見えていないかもしれないこと、見えない人の方が実は柔軟に見ているかもしれないこと、そうしたことをお互いを感じることによって、関係が揺れ動く。

第5章 ユーモア - 生き抜くための武器

Point 1. どういう社会を目指す??

Point 2. 見える人と見えないひとの経験が100%同じになることはない。

[この章について]

客観的で抽象的な「情報」に対して、その人の視点を含んだ「意味」がある。見えないこと
でおのずと打荒れてくる「意味」と、見えない人が意図的に作り出す「意味」がある。この
後者の意味の究極携帯としてのユーモアについて考える。

●概要

- * 「障害」と「笑い」の関係
 - ・「不自由さ」の扱いについて
- * 今日の Pasta は、、、?
- * 表現のツールが限られているから、、、
- * ユーモアって何?
 - ・ユーモア論 by フロイト
- * 過剰な善意
- * 障害とは何か
- *

【「障害」と「笑い」の関係】

ユーモア：笑いを誘う発言や行為。(この章では障害そのものが笑いの対象になる。)

「障害＝深刻なもの＝笑ってはいけないもの」というイメージでとらえられる場合が圧倒的。
しかし、障害をネタに周囲を笑わせて盛り上げるような明るさを持った人に良く出会う。
→自分の先入観を吹き飛ばされるような痛快さを何度も味わった。

・「不自由さ」の扱いについて

見えない人にとって、社会は決して自分の身体にフィットするようにはできていない。

例：駅前の放置自転車、タッチパネル、カード決済時のサイン、他

不自由な環境を物理的に変えず、その意味を
変えることによって生き抜こうとしてみよう

→ユーモアが武器になる

【今日のパスタはミートソース味か、クリームソース味か？】

難波さんの体験談。一人暮らしの難波さんが自宅でレトルトソースのパスタを食べるとき、開封してみないと味が分からない。→本当はミートソース味が食べたかったのに！

[不自由な環境の意味を変える]

食べたいアジが出れば当たり、そうでなければハズレ。＝運試し。

見えないことに由来する自由度の現象をハプニングの増大としてポジティブに解釈

(他の例：回転寿司はロシアンルーレット、自動販売機はおみくじ)

【表現のツールが限られているから、、、】

視覚障害者で話し上手な人や話好きな人が意外と多い。

木下路徳：「小学生で見えにくくなった時、友達の輪に入りたという気持ちから、話術で人を笑わせられるようになろう、と思った。ラジオのパーソナリティみたいに喋れたら楽しく過ごせるんじゃないかと漠然と思っていた。」

【ユーモアって何？】

・困難な状況をポジティブに生きていることへの関心や敬意も感じる。

→けれど、それだけでは笑いは生まれない。

実態：自分の身体に会わないデザインやサービスを斜めから見てみる。

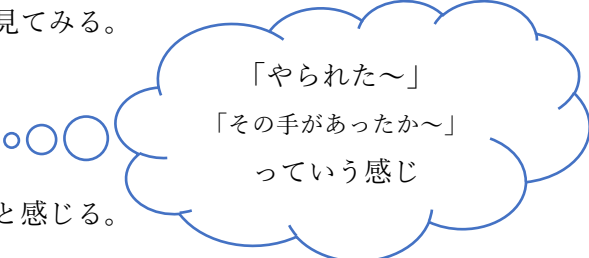
そうすることで、彼らの方が寧ろ遊んでいる

笑いのジャンルとしては自虐に近い

自虐の攻撃対象が本人であるのに対し、言われた側もチクツと感じる。

→笑いのネタに「障害」がかかわっているから。

→それを聞いている私たちが健常者だから。



「やられた～」
「その手があったか～」
っていう感じ

・ユーモア論 by ジークムント・フロイト (精神医学者)

「ユーモアの秘密は視点の移動にある」

→現実が自分を苦しめようとしているけど、そんな状況を超越した視点に立って、「世の中そんなもんさ」と笑い飛ばす。苦痛を強制されるような状況にあっても自己を守るためのひとつの防衛方法。

→周囲の人は当事者の気持ちに感情移入し、同情し、憐れみを感じる準備をする。けれどユーモラスな一言により、こうした予期が裏切られ、感じるはずの感情が的外れなものになる。。この拍子抜けの状態を「感情の消費の節約」という。

(消費：使われるはずのものが使われなかった)

【過剰な善意】

序章：健常者の善意がかえって障害者に対して壁を作る

よく分からないからこそ、先回りして過剰な配慮や心配をする

健常者の「何かしてあげなければいけない」という緊張で関係が硬くなる

過剰な善意も
困りもの。

[実態]障害者同士だと、相手の障害をネタにして笑い合う事はよくある。

→けれども、健常者が入ると、障害は触れてはいけないもの、タブーになる。

→こうして障害者はアンタッチャブルな存在になる。

サポートする／されるの関係に縛られるとなかなか口にできない。

障害者

①

障がい者

②

障碍者

③

・最近漢字的意味的に、①より②や③の表記が好まれるようになった。

[実態]音声読み上げソフトが上手く認識できず、「さわるがいしゃ」と読み上げる事がある。

→誤読されて初めて、見えない人は、執筆者の配慮に気づくことができる。

=配慮を必要とする障害者にとっては成功なのかもしれない。

BUT、差別のない中立的な表現という意味での「ポリティカル・コレクトネス」に抵触しないという意味では、むしろ逆効果。障害の定義を考慮に入れるなら、「障害者」という表記の方が正しい可能性もある。

何か健常者は思い込みをしていないか？

・障害者にとっては、障害は当たり前で日常。(障害の中身や考えの違い、対立はある。)

こういう経験がない健常者にとっては、障害を抱えた人同士の日常に触れるだけでも思い込みをかえるのに十分なヒントを得られるのではないかな？

【障害とは何か】

障害者＝障害を持っている人？

→「できなさ」「能力の欠如」だから触れてはいけないものと感じる。

(このイメージは、労力が画一化された産業社会の発展にともなって生まれた説)

↓

「見えないからできること」ではなく「見えないからできないこと」に注目が集まった。

2011年、改正障害者基本法の障害者の定義↓

「障害及び社会的障壁により継続的に日常生活または社会生活に相当な制限を受ける状態にあるもの。」

社会の側にある壁によって日常生活や社会生活上
の不自由さを強いられることが、障害者の定義に
盛り込まれた！

従来の考え：個人モデル

→見えないことが障害。

新しい考え：社会モデル

→見えないから何かができなくなる、そのことが障害。

障害者の表記を変えることは問題の先送りに過ぎない。

=配慮の背後にあるものは「個人モデル」

「障碍と表記してそのネガティブさを社会が自覚する方が大切ではないか」by 筆者

「障害の社会モデルがまだ浸透していないのは、障害を受け止めるアイディアや実勢が不足しているから。」by 筆者

まとめ (パスタの話に戻る。)

もちろん、味を選べた方がいいのは当然。しかし、見える人と見えないひとの経験が100%同じになることはない。想像する味も違う。違いをなくそうとするのではなく、違いを生かしたり楽しんだりする知恵のほうの方が大切である場合もある。いずれにせよ、健常者が見えない人の価値観を一方的に決めつけるのが一番よくないこと。

言葉による美術鑑賞の実践がそうであったように、「見えないこと」が触媒となるような、そういうアイディアに満ちた社会を目指す必要があるのではないか。

筆者より

見えない人・見えにくい人へ。本書を執筆するにあたって、ほんの限られた人にしかインタビューをすることができませんでした。ひとくちに「見えない人」といっても、障害の種類（どのように見えないのか、見えにくいのか）や年齢、あるいは性別によって世界を見る見方はさまざまでしょう。本書は見えない人についての一般論として書いたつもりはありません。「むしろここは違うな」「ここはよくわかる」など、みなさんの見え方についての会話を、本書をまぜていただければ幸いです。